



上昭和30年ころの秋
大根の種まき風景。
馬によるうね起こし
作業も見られる。
左昭和11年夏、北大
第二農場前で。荷の大根は1把10本である。
(新琴似屯田兵中隊本部「開拓資料室」提供)

新琴似大根

秋の風物詩はたくわん漬けと大根スダレ。

「ヒヤーッ、ひでえ道だ」
一把十本の大根を山と積んだ馬車が、泥沼のような石狩街道を進んで行く。朝四時半出発、悪路との苦闘の末、目的地の二条市場へは三時間もかかったという。

それでも、年間の生産本数八百万本、当時の金額にして一本八厘、総額十数万円の利益を上げた。

大正から昭和初期にかけて、新琴似ダイコンは黄金時代をむかえ、その名は全道に知れた。

それでも、年間の生産本数八百万本、当時の金額にして一本八厘、総額十数万円の利益を上げた。

屯田兵が生みの親

新琴似の開拓は、明治二十年、二十一年の屯田兵入植に始まる。

「新琴似七十年史」は「鋸、鎌で先づ熊笹や樹木等、家屋の周辺

安東貞一郎大尉は、自給を目的として大根の種子二合を兵村各戸に配付。これが、新琴似大根の産声となつた。当時、隣りの篠路兵村（現屯田町）の方が、すでに大根の産地として知られており、札幌から下肥を運んで、作った大根を札幌で販売していた。しかし、翌三十一年の四月、七月、八月と連続して篠路を襲つた大洪水は農作物をすっかり流し去つた。このためにわずかな新琴似大根は高値を呼び、新琴似の人たちが大根づくりに本腰を入れる契機となつた。

打撃を受けた篠路兵村では米作に転向。新川、創成川を水源とした「水利権」が新琴似から譲渡された。

「たくわん

亡國論」に反発

大根づくりは新琴似が主産地となつた。さつそく新琴似では視察隊を組織し、道南の七飯、白老、上川の鷹栖など道内の大根産地をくまなく見て回つた。帰郷後、まず、相場協定が作られた。これは、違反する者は村八分といふ厳しいものだつたようである。

地肌のよさと柔らかさが信条

から開き向ひ家との通路を漸次開拓面積を広げて行つた。鍬の使用法も知らなかつた者も有つたと言ふ事であるから砥石、鏟は火打ち道具かと思ひ違つた程だつたと言はれる」と新琴似農業の夜明けを綴つてゐる。

明治二十三年、屯田兵中隊長の安東貞一郎大尉は、自給を目的として大根の種子二合を兵村各戸に配付。これが、新琴似大根の産声となつた。当時、隣りの篠路兵村（現屯田町）の方が、すでに大根の産地として知られており、札幌から下肥を運んで、作った大根を札幌で販売していた。しかし、翌三十一年の四月、七月、八月と連続して篠路を襲つた大洪水は農作物をすっかり流し去つた。このためにわずかな新琴似大根は高値を呼び、新琴似の人たちが大根づくりに本腰を入れる契機となつた。

打撃を受けた篠路兵村では米作に転向。新川、創成川を水源とした「水利権」が新琴似から譲渡された。

新琴似でつけ物を始めたのは村田勇さん。その工場は、新琴似歌舞伎の常設劇場「若松館」を解体、移設したもので、直径二メートルのつけ物樽が並んでいたといふ。同工場は月寒二十五連隊の専用工場としても利用されていた。現在、つけ物工場は三軒を残すのみ。

作付が札幌市需要量の八割を占めていた新琴似大根も、連作によって地力が消耗し、加えて害虫の大量発生が相次ぎ良質の大根がとれなくなつた。それにも増して市街化の波が新琴似に押し寄せ、畠は宅地へと転換して行つた。ある老人は「秋の大根馬車や大根スダレがまったく見られなくなつてしましましたね」とさびしげに語

る菅進さん（七六）は「私が子供のときから大根は盛んでしてね。札幌合併まで続いていました。新琴似大根の魅力は何と言つても地肌のよさと柔らかいことですよ」と語る。

札幌市民の食卓が軟ニシン、みそ汁、たくわんだった大正十一年、北大教授の森本厚吉は「たくわん亡國論」を発表。「日本人はお茶づけにつけ物ばかり食べているから体位が貧弱だ」と食生活改善を訴えた。だが大根づくりに精魂を込めていた新琴似の人たちにとっては面白くない発言であった。一言文句を一と森本宅へかけつけた青年が、相手の品格に押され、とうとう何も言えずに帰つて来たことがあつたといふ。

新琴似でつけ物を始めたのは村田勇さん。その工場は、新琴似歌舞伎の常設劇場「若松館」を解体、移設したもので、直径二メートルのつけ物樽が並んでいたといふ。同工場は月寒二十五連隊の専用工場としても利用されていた。現在、つけ物工場は三軒を残すのみ。

作付が札幌市需要量の八割を占めていた新琴似大根も、連作によつて地力が消耗し、加えて害虫の大量発生が相次ぎ良質の大根がとれなくなつた。それにも増して市街化の波が新琴似に押し寄せ、畠は宅地へと転換して行つた。ある老人は「秋の大根馬車や大根スダレがまったく見られなくなつてしまつましたね」とさびしげに語